

フェルメールのオイコノミア

佐々木 隆*

Oeconomia about Vermeer

Takashi SASAKI*

Key words : フェルメール Vermeer
レンブラント Rembrandt
家政学 Home economics
沈黙 silence

はじめに絵画的な前提

アニメでも良く知られている『フランダーズの犬』の最後にネロが教会の中で見たドラマチックな『キリストの降架』の絵の作者ピーテル・パウル・ルーベンス(1577~1640)は鮮やかな色彩で知られているフランドル派¹の画家である。ルーベンスは王侯貴族を相手とする画家である。さらに、彼は大使としても活躍しスペインを代表する宮廷画家ディエゴ・ベラスケス(1599~1660)に会って影響を与えている。彼は現在のオランダ南部、ベルギー西部、フランス北部にまたがるフランドル地方を中心に活躍したので、影響は広く及んだ。ネーデルラント連邦共和国(現在オランダ)のレンブラント・ファン・レイン(1606~1669)はルーベンスの作品を知っていたであろう。それに対し、レンブラントはフランドル派とは異なる作風のオランダ画派と呼ばれる画家である。その絵の販売相手は市民であった。王侯貴族か市民で絵のテーマや作品の大きさまで変わっ

てくる。宗教的な歴史画の注文は絵画を布教に利用したカトリックの教会からはあっても、風俗的、偶像的な絵画を嫌ったプロテスタントの教会からは注文はなかったであろう。ここで考察するヨハネス・フェルメール(1632~1675)もそんな歴史的、社会的背景の中にあるオランダ画派の一人であった。

ルーベンスはイタリアへ行つて学んだ。イタリアルネサンス(14世紀~16世紀)の美術の影響がオランダに伝わってきた。同じ時代と地域の文化的共通性が三人にはあったであろう。そこには絵画が王侯貴族のパブリックな意味を持った大邸宅の神話的な装飾品から富裕な市民だけではなく一般の市民のプライベートな屋敷や部屋を飾るインテ

*東北女子大学

¹ フランス語でフランドル(英語ではフランダーズ) オランダ・ベルギー国境のスケルデ川(エスコール)下流域から、フランス北東部のアルトア丘陵にかけての北海沿岸地域



リアへと広がる変化しているようである。それゆえ、共同体的な信仰であるカトリックのルーベンスやベラスケスには王侯貴族の栄光(傲慢)と没落への不安があるように思われるが、スペインから独立を獲得した個人的な信仰であるプロテスタントのオランダの市民の日常生活の現状肯定的な自信があるように思われる。フェルメールはプロテスタントであったが結婚の際にカトリックに改宗したと言われている。レンブラントはプロテスタントのカルバン派である。三者には信仰深淺は別として宗派上の差異があるようである。

フェルメールの「風景画」のオイコノミア

日常生活(いわゆる衣食住)を問い見直すことがオイコノミアの課題である。『デルフトの眺望』は、デルフトの街の生活空間を描いた絵である。静かであるですべてのものが静止しているように見える。空と建物と運河と岸にわずかな人々の営みが描かれている。筆者がフェルメールの絵を初めて見たのが、五十年以上も前のこの『デルフトの眺望』で十代の頃だった。机の上で画集のページをなにげなく開いた途端、絵に描かれたものが何であるか分かる前に、その絵の中へ

吸い込まれるような気持ちになったのである。それは驚きの体験だった。いわゆる名画を見ると美術館の空間を前提にして眺めてしまうのは、いわゆる泰西名画とよばれる絵画が王侯貴族の公的な館に飾られたものが多かったからであろう。しかし、この絵がまず置かれたのは市民であるフェルメールの家である。この絵が市民の家のインテリア(調度)として置かれたことから、その絵と共に暮らす作者とその家族の生き方になんらかの相互関係があったことが推測される。日常生活にふさわしい絵が取り入れられ、デルフトという町に住むことへの安心感を得たり、心地良さを味わったり、趣味を満足させたり、生きること喜び、寂しさや悲しさに対する静かな慰めまでも得ていたと思われる。

美しい風景の描かれた絵を見ても、作品の外から熱心に眺めるだけで、自分の現状を超えてその世界の中へ入って行けるものではない。つまり、この絵から受けた感動は、作品を眺め鑑賞し、それとともに美しいと感じるよりも前に、作品の世界へ取り込まれ、驚き(What?)そのものが体験されたのであった。その時、魅了されるとはこういうことなのかと思った。自分の日常から抜け出し、音のない静かな世界を体験したのであった。自分の日常生活の中で、このような体験はめったにあるものではない。驚きは、本質への問い(What?)となった。作品が良いものと感じられる原因を絵に描かれた生活空間(衣食住)の分析を通して理解したいと思う。

作者フェルメール(1632-1675)はデルフトに生まれたネーデルラント連邦共和国(1579-1795現在のオランダおよびベルギー北部)の画家である。現存する彼の描いた風景画は『デルフトの眺望』(1659-60) 96.5 × 115.7cmと『小路』(1660) 54.3 × 44cmの二点だけで、他は、室内の人物で、絵に向かって左の窓からの光が射している。

『デルフトの眺望』には、スヒー運河(コルク川)のデルフトの南側の街並みを描いたと言われる。スヒー運河(コルク川)とは、それ

はコルク (Kolk) 川とスヒー (Schie) 運河の交わるところを指しているようである。現在のデルフトの風景をいくら見ても、これほどまでに美しくは見えないであろう。『小路』という作品は白い頭巾をかぶる二人の仕事をする女性と、その間で二人の子どもがかがんで遊んでいる日常の風景である。『デルフトの眺望』に描かれた町のレンガ造りの建物の中にこの『小路』の確かさが存在しているのである。しかし、印象は非常に違う。どちらの絵にも人間の小さく描かれていて風景の一部になっていることに対して動かぬ古びた建物が重く持続するものを主張しているかのようにである。フェルメールは絵の中に描かれていない小さな人々の営みが町を作り、建物を作り、小路を形成してきたことを暗示しているようである。『小路』の建物の上にある三つの溝は銃眼であるという。そこに町を守るといふ強い意志を見ることができ、だれも銃を構えてはいない。銃眼から銃身が出ていないことは平和の象徴である。平和をさらに示すのが『小路』の中で遊んでいる小さな男の子か女の子たちの姿であり、彼らの成長に未来が託されているのである。

美しいと我々が感じるのは、作者が風景をそのまま写したのではなく、形を少し変え、て、さまざまな事物を画面の中に調和的に収めることによって美しさが絵の中に作り出されているからである。美の条件としての調和が形成されている。空の雲の様子、街並み、教会の尖塔そして船が描かれ、静かな川の水に映る建物の影、陸の上には点景人物として生活する人が立っていて風景をきっちり調和され安定感を見る者に与えてくる。

暮らしの中から、美しさと静けさを描き出すための絵画の技法というH O Wの説明から、カメラ・オブスキュラという写真のような道具を使ったと言われる。これを使えば物の形が正確に描け、遠近法もしっかりと表現できるようである。しかし、そこに映るものはすべてそのままの現実ではなくカメラによる肉眼とは異なる非日常的なゆがみをもった映像である。さらに、見えるものの中から何をを選び出して描く

かの選択はフェルメールの考えによるものである。また、カメラの映像は鏡やガラスのような左右反転ではなかったはずで、上下逆転して映し出されていれば、世界を上下反対に見るといふ視点も得られたはずである。今日でも絵を描くときに逆さまにして全体のバランスを考えるのと同じことを新鮮な目で行ったと思われる。なぜ、そのような道具を使う描き方をしたのか何故W H Yという動機を尋ねれば、それを使って見えてきたもの、描けたものなどが、彼の表現に必要なことからであろう。何故気に入ったのか、彼は何を描きたかったのかというこの絵の本質W H A Tが何であるか理解してゆこう。

『デルフトの眺望』について

1 空

まず画面の構成を分析すると、画面の半分以上を占める大きな空は抜けるような青空ではなく柔らかな白い雲と画面の3分の1を黒い雲が対比的に描かれている。黒い雲は近く、画面の外へと広がって、画家の点、それは我々の見ている頭の上、まですべてかかっているように思わせる。太陽は中央の黒い雲の上、ほぼ右の上の方であって真中の前景の建物の右の後ろの方が明るくなっている。

白い雲は遠く、そして遙か彼方は薄く白くかすむように見える。空の部分の柔らかく白と黒のバランスが取れ、白い雲はより白く優しうに見える。このような雲は音もなく静かに動いてゆく時の経過を感じさせない時を表現している。そして画面の上半分に空の遠近が描かれているために、その広がりや奥行きによって、我々は自然の中に包み込まれる。

つまり、絵を見た瞬間にすでに絵の世界に我々は取り込まれているのである。オランダの天気は変わりやすく雨が降りやすいと言われる。天候は、農業や貿易にもかかわるが、人間の行動にも健康にも影響を与える。描かれた空模様はそんなことまでも暗示しているように思われる。

2 町

雲の下、絵の中間よりも少し下に描かれた町の建物を描いた風景が視線の向かう所である。向かって右に町に入る青い2つの尖塔を持つロッテルダム Rotterdam 門があり（現在は無い）。右寄り3分の1に新教会の尖塔が見える。絵のほぼ中央より少し右に運河があり、運河の入口にある黒い屋根の上に塔のようなものがあるスヒーダム門（現在は無い）の時計がある。手前に世俗の生活を支配する時計のある建物や向こうにある聖なるものの教会という町の中心となるものが見た目には同じ高さで対になって並んでいる。これらの建物が市民の生活の中で同じように重要な役割を果たしていることが分かる。大きな建物の付近には人が集まり出入りしているざわめきが予想されるが、全く人がいないために、静けさを感じるといふ演出がなされている。

スヒーダム門の時計は朝の7時10分を指している。この絵はまさにその瞬間の情景を描いたものである。時計の鐘の音はこの絵の中から聞こえてこない。すでに鐘は7時を告げ鳴り終わった後であるからであろう。ここでも鳴り終わった後の急にシーンと静かになった雰囲気漂っている。時計が鳴り終わり、これから一日の労働が始まるうとしているがまだ何も動いていない。人物に影がないために時間の止まったように見えるのである。

茶色いレンガ造りの町の建物の上の方には青い屋根があり幾つもの尖塔が棘のように突き出ている。雲がそれらの尖塔を柔らかく受け止め、とげとげしさを和らげている。

3 川と運河

川によってデルフトの町の建物が水の上の乗っているような構図になっている。オランダは低地で高低の差があまりないので川は日本の川のように早く流れることはないであろう。静かな川の水に映る空と建物の影がまじりあって、空と水という実体として掴みたいものの間に人の営みがあることが示されている。なお、フェルメール (Vermeer) の meer はオランダ語の湖水の意味がある。描かれている水には作者

自身を暗示するものがあるのかもしれない。

コルク川の彼岸に中型の船と小型の船がつながられている。外洋を航海する大砲も積んだような大きな帆柱の船ではなさそうである。船には衣食を中心とした生活物資が積まれている。昔は陸路よりも海路や運河が物資を運ぶ交通の手段だったのである。大きな船は海に出るもので嗜好品や貴重なものを運んだであろう。中型の船や小型の船は川や運河を航行し、市民の生活に密着したものである。しかし、どの船にも人影はみえない。にぎやかな運搬の音がしないのでここも静かなのである。

川面に映る建物の少し大きく描かれた影からさつき少し風の吹いた影の乱れがあり微かな波が立っているが、それにもかかわらず今は川の流れも風もまるで止まっているようである。それは小波が同じようにねり無限に反復を続け永遠なるものを感じさせるからである。川の流れが右の手前の方に広がって切れて川の広がりを感じさせている。

4 此岸

鐘の音が止んだので二人の女性が立ち話をしている。穏やかな日常の徴として描かれている。黒い衣服に白いボンネットを被っている。こちらの岸に来ている一艘の船から何かを買ったことを話し、船のそばにいる数人の人々は船に積まれた荷物についての取引をしているのかもしれない。重たい荷物を動かすような姿はない。しかし、小さく遠く見えるので声が聞こえるようには感じられない。それゆえますます静かな風景となっている。

これは王維の鹿柴（しかを飼っているところ）「空山（さびしきやま）に人を見ず／但人語（ただじんご）（かすかなひとごえ）の響を聞くのみ／返景（へんけい）（ゆうひ）深林（しんりん）に入り／復た青苔（せいたい）の上を照らす」という詩の方法を絵で朝の静けさを表現しているようである。

5 歴史

この作品の背後には、デルフトの町では1654年10月12日の朝に

銃砲店の火薬庫が爆発し、町の4分の1が壊滅状態になるという大惨事があると言う。レンブラントの弟子であったカレル・ファブリツイウスはフェルメールに大きな影響を与えたと思われるが、ファブリツイウスもこの爆発事故の巻き添えで亡くなっている。この絵に描かれていない町の方角にはまだ事故の跡が残っていたと言われる。中山公男は「△デルフトの眺望」の平和な視覚は、ひとつの明確な決意によって選ばれたものだといふべきである。いや、△デルフトの眺望▽だけではない。フェルメールが私たちに提示する静かなヴィジョンのすべてが、「静謐」への無限の意志を込めて描かれたといふべきであろう²と言っている。

静けさは沈黙でもある。悲劇は言葉では語り尽くしえないものである。確かに、語りえぬことについては沈黙せねばならない。しかし、この絵にある静けさは語りえぬものではあっても押し黙った沈黙のようなものではない。黙祷のようなものを感じる。

確かに、当時の人、その事故を意識する人にはそのような静謐や平和への意志を感じ取られるであろう。それはこの絵の中央にある尖塔は教会の存在を示すからである。教会あるいは信仰において、神の声を聴くために沈黙するのである。それは祈りでもある。この絵では俗耳には聞こえぬ神の声が鳴り響いているのかもしれない。しかし、マックス・ウェーバーに『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と言う本がある。簡単に言えばキリスト教の倫理が世俗化して資本主義に変化したということを示したものである。それになぞらえて考えれば静謐とも言われる宗教的な沈黙が、フェルメールの風俗画においては個人の秘密を守るための世俗的な沈黙へと変わったように思われる。

そのようなデルフトの歴史もキリスト教もフェルメールという画家のことも全く知らなかった筆者ですら感動させたものはなにかという

事の説明としてはまだ不十分である。また、火薬庫の爆発による悲劇から平和への意志や静謐への意志が導かれるものなのかという疑問もある。この絵にも、風俗画にも、平和や静謐への意志が必ずしもあるとは認められないからである。

「キリストとマリアとマルタ」労働を評価するプロテスタンティズム

三つのキリストとマリアとマルタの絵（ルカによる福音書10章38～42）

フェルメールの物語画は少ない。これは初期の作品とである。パンは身体の糧とキリストの言葉は心の糧という対比ができるであろう。

レンブラントの「キリストを囲むマリアとマルタ」絵(60.96 × 45.72 cm)では、描かれた対象となる人物を光が闇の中から照らし出し、どのような場所にいるか分かるが、家の中で薄闇が三人を取り囲んでいる。マルタはマリアにパンを入れる籠を渡そうとしているように見える。マリアの後ろの位置に離れた所でパンを竈で焼いている女性の姿が描かれている。ルーベンス 2887 × 300 cm はいかにもバロック風の動きのある華やかな色彩でベランダにいる三人を描いている。ルーベンスとレンブラントの違いは家の一部でもベランダと言う屋外であることと屋内との違いである。そこに外交的な性格と内向的な性格の違いを読み取ることができるかもしれない。また、二人の共通性はマリアの背後にパンを焼くらしい働く女性が小さく描かれていることである。空間的な奥行によって物語性を表現しているようである。

フェルメールのキリストはどのような場所にいるのかよく分からないが、狭い室内のようであり、レンブラントと比べると三人の姿が画面に比べて大きく描かれている。それにもかかわらず、二人の女性は内面的な個性が描かれているようには見えない。レンブラントのマリアとマルタは頭の被り物が異なり、マルタは仕事用のものを被っている。それはルーベンスも同じように見える。ところがフェルメールではマリアもマルタも同じようなものを被っている演劇の俳優が役割を

² 中山公男 フェルメール全作品 中央公論社 1979 p158-165



ただ与えられているだけのようである。レンブラントのキリストはマリアに語り掛け、マルタには顔を向けていない。これはマリアに語っている最中にマルタがやってきて、これから声をかけようとする時のように思われる。

フェルメールの「キリストを囲むマリアとマルタ」158.50 × 141.50 cmの絵は必ずしも、まだいわゆるフェルメールの光の魔術と言われるような描き方ではない。この時期はまだカメラ・オブスキュラを使っ

ていないようである。それでも彼らしさを感じさせるものがある。輪郭の見えないところは単純に暗いから見えないと思われる。そしてどこにもパンを焼くために働いている女性の姿は描かれていない。つまり、物語性が希薄となっている。それは内面性が描かれていないということである。ルーベンスとフェルメールのキリストはマリアを指さしてマルタの方を向いているところがレンブラントと異なる点である。どの絵にも共通するのは、神の声を聴こうとするようなマリアの沈黙である。しかし、沈黙の意味が異なるのである。

この絵の題材は、聖書のルカによる福音書10章「38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。39 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。40 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせています。何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」41 主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。42 しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」によるものである。

これは普通に読めばマルタの接待のために家政に忙しく立ち働いている行動よりも、何もせず黙ってイエスの話を傾聴しているマリアを肯定しているように読める。観想的な行為と活動的な行為というアリストテレス以来の人間の行為の分類で、真理を眺めることを何かを肉体で作出す事よりも高く評価する伝統があったからである。真理の言葉を聞くことも観想的な行為であった。それはレンブラントの絵にあるようにマリアの方に目を向けているという表現になるであろう。

しかし、マルタはイエスに叱られているようにも見えるが、何よりもイエスを招き入れたのはマリアではなくマルタである。マルタには教え諭すように優しく声をかけたのである。それは聖書の中でイエス

に二度も声を掛けられるのはマルタだけだからで、叱るだけならば一度名前を呼べば良いからである。中世の神学者マイスター・エックハルトはマリアがまだ信仰において未熟なものだから、イエスは彼女の信仰を導いてやるために話をしていると言うのである。マルタよ、マルタよ、と呼びかけている。これはお前の活動的な生き方が優れていることは当然のことなのだよという意味だとされる。マルタがパンを持つている姿は勤勉な労働を高く評価するプロテスタントイデオロギイの倫理とも一致するように思われる。ルーベンス、レンブラント、フェルメールの三人の中でマルタを目立つように描いているのはフェルメールである。しかし、宗教的な歴史画からマルタを中心に描かれるのは世俗主義（風俗画）への傾きがあるように思われる。

この絵が依頼されて描いた絵であつても作者が絵の内容を受け入れて製作したのであるから、その内容の意味も肯定していたように思われる³。つまり、「牛乳を注ぐ女」に通じるマルタの労働と「手紙を読む女」に通じるマリアの沈黙の両方をフェルメールは肯定しているように思われる。黙って座るマリアから静止した永遠なるものだけが



伝わってくるのではなく、立っているマルタからは時間的な地上の変化する動くものや物音が聞こえてくるような絵である。

「牛乳を注ぐ女」の手前にあるパンはイエスに給仕してマルタが持ってきたパンによく似ている。この時代、パンは自宅で焼くものではなく、パン屋から買ってくるものである。経済的には必ずしも貧しかったと思われないがフェルメールの妻はフェルメールの遺作をパン代として支払いに当てている。この絵は食事の準備である。いわゆる流しも鍋も釜も包丁も見えないがたぶん台所であろう。

オランダはプロテスタントの国だったので、禁欲的な倫理に従って生活がなされたと思われる。それで美食の快楽は否定されていたと思われるので、これは貧しい朝食ではなく、質素な朝食なのではないだろうか。

牛乳を注ぎ込む土鍋のような物には鍋の手前の小さくされた固いパンが入られるのであろう。硬くて歯の立たないようなパンが柔らかくされ食べられるものになる期待が絵の優しさとして表現されている。女のスカートとテーブルクロスの色は聖性であり、衣服の黄色は労働の象徴で、世俗的なものを聖性と結び付け肯定しているのではないだろうか。

「手紙を読む女」の画面は手前の黄色いカーテンが画面の上下に三分の一近くをカーテンが占めている。カーテンは彼女の秘密を隠す意味があつたのではないか。その向こうに鮮やかな模様が入った美しいテーブル掛けであろうか布の質感が良く出ている。それは充実した生活の実感を示しているものであろう。その上には果実が幾つも置かれている。豊かな財産の象徴である。それにしても、皿が傾き皿の上の果実がこぼれてきている。果実はパンとは異なって熟してゆくものであり、腐ってゆくものである。希望と不安が同時に暗示されているかもしれない。

手紙の内容は恋文だと言われている。白い壁になつていいる部分に

³ ありふれた営みもしくは Vita Activa——「マルタとマリア」、エックハルトの義解——竹山重光 <http://www.wakayama-med.ac.jp/med/iasp/eth/zettel/vitaactiva.pdf?fbclid=IwAR3xP2DbV8YFdh9Hclsfk2teOuu-1DeIzVkB8tjFscKMinA34VOYKDBg-j1M>

キューピットの絵が掛られていたことがレントゲンの撮影で分かったからである。それを消して白い壁にしたのである。ではなぜ消したのであろうか、手紙の内容を恋文と言う意味に限定したものにしたくなかったのではないか。キューピットによって手紙の内容を示さず、キューピットを消すことによって沈黙させ、この絵は静けさを獲得したのである。キリスト教における「福音」とは良き便りという意味である。この女はマリアが天使から神のお告げを聞いた代わりに手紙で、誰かからの知らせを聞くという、世俗的な良き便りを受けているのである。



レンブラントの「若い女性」の衣服自体には飾りが見えないが良い晴れ着のようなものである。しかし、ベレー帽を被っているがほとんど気付かれない、毛皮の衣装を着けていても、つまり、どんな衣服であるか描くよりも、女性の優しい人柄を描くことへ意識が向けられている。ヘンドリックキエという固有名詞をもった肖像の輪郭は影の中へ消えてゆく。彼女はレンブラントが破産した後も正式な妻ではなかったが、彼に寄り添い続け、彼を支えた人物である。この絵は人格を伝えてくる。それに対してフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」はターバンの青と黄色が目立つ、襟の白さも目立ち、大きな真珠の玉の一粒を浮かび上がらせるように対象を描き、衣服も明確に描かれている。ターバンという衣装は東洋的なエキゾチックな気分をべ

レー帽や頭巾と比べて持つているように思われる。トローニーと呼ばれる不特定の人物である美しい少女の初々しさが感じられる。しかし、もはや宗教的な聖性とは縁のない世俗的な絵となっている。微かな声にならない声と驚いた少女の表情以上のものを感じることができるであろうか。驚いた一瞬が永遠化されている。彼女を驚かせた人物との人格的なかかわりは無い。それゆえにいつまでも時間が経つことはなく、人格的に成熟することもなく、初めて見た時と同じように初々しく見飽きぬ魅力があるのである。真珠の美しさがいつまでも変わらぬように。

参考文献

- 小林頼子「フェルメール論」八坂書房2008年
 小林頼子「牛乳を注ぐ女」ランダムハウス講談社2007年
 エックハルト「エックハルト説教集」田島照久編訳 岩波文庫1990年
 朽木ゆり子・福岡伸一「深読みフェルメール」朝日出版2012年
 芸術新潮2016年2月号
 芸術新潮2018年10月号